

キャンピングカー<sup>3</sup>で往く  
異世界 徒然紀行

4

著 タジリユウ

絵 嘴広コウ





### ガレン

アルカンの街のみんなに慕われている  
凄腕の元冒険者。  
飲食店で絡まれていた  
シゲト達を助ける。

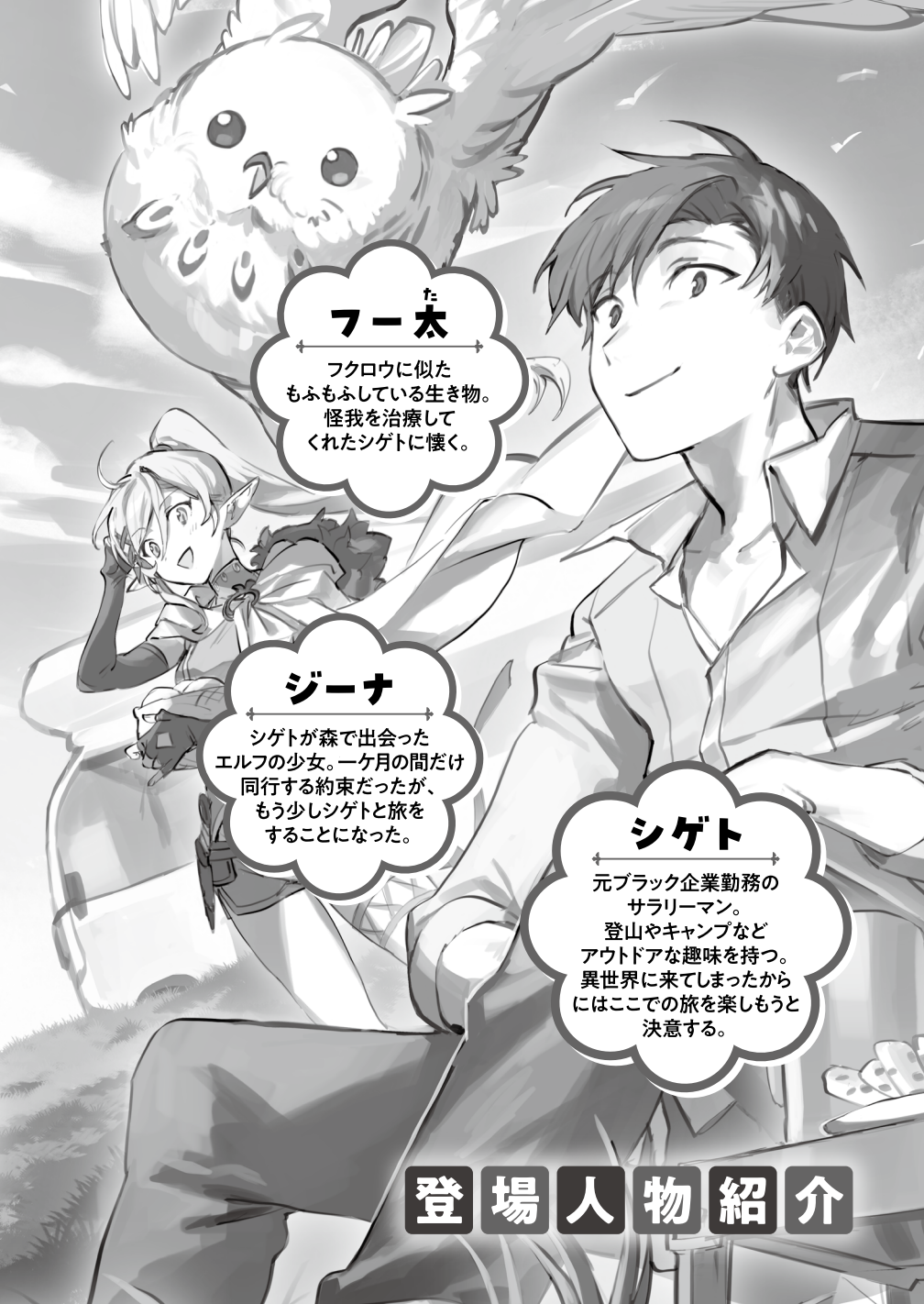


### コレット

フェビリー村で疎まれていた  
黒狼族の少女。  
シゲトの提案で、  
旅に同行する  
ことになった。

### カルラ

アステラル火山で  
出会った龍人族の少女。  
アイスクリームの  
虜になり、旅に同行  
することになった。



### フータ

フクロウに似た  
もふもふしている生き物。  
怪我を治療して  
くれたシゲトに懐く。

### ジーナ

シゲトが森で出会った  
エルフの少女。一ヶ月の間だけ  
同行する約束だったが、  
もう少しシゲトと旅を  
することになった。

### シゲト

元ブラック企業勤務の  
サラリーマン。  
登山やキャンプなど  
アウトドアな趣味を持つ。  
異世界に来てしまったから  
にはここの旅を楽しもうと  
決意する。

## 登場人物紹介

## 第一章 ベラロール塩湖

「さて、今日はここまでかな」

道から少し逸れて見晴らしのいい川の隣にキャンピングカーを停車する。

俺——吉岡茂人は旅の相棒でもあるキャンピングカーに乗りながら、異世界の美しい景色を楽しみつつ、ここまでやってきた。

長年の夢であったキャンピングカーを購入し、オートキャンプ場で初めて車中泊をしていたら、次の日なぜかキャンピングカーと共に別の世界へと転移していたのだ。

「今日はだいたい進んできましたね」

助手席に座っている耳が長く尖っていて、白銀色の髪をポニーテールにしているエルフの女性の名前はジーナ。

「ホーホー」

そしてジーナに抱きかかえられている、真っ白でもふもふとしたフクロウの名前はフー太。俺がこの世界へやってきて初めて出会ったフー太は、森フクロウという魔物で、なぜか俺の言葉だけは理解することができる。

「シゲトお兄ちゃん、運転お疲れさま」

後ろの座席に座っているコレットちゃんは黒狼族という種族で、黒い髪をした頭からはびよこんと耳が生えており、お尻の近くにはもふもふとした黒い尻尾が生えている。

「ふいぐずと座っていると身体が固くなっちゃうぜ」

その隣に座って伸びをしている、燃え盛る炎のように真っ赤な髪をした少女の名前はカルラ。頭からは二本の白い角、背中からは一對の翼、腰からはトカゲのような尻尾が生えている。彼女は龍人族という珍しい種族だ。

今はこのメンバーでキャンピングカーに乗って異世界を旅している。

「みんなもお疲れさま。キャンピングカーで走れそうな道を走っていたら、だいぶ進んできたようだな」

朝にジーナの故郷であるハーキム村を出発してからずっとキャンピングカーを運転してきた。もしかすると今日は異世界へやってきてからキャンピングカーで一番長い時間、走ってきたかもしれない。

しばらくは大きな村や街がなく、まっすぐ進むと森や山があるので、だいぶ迂回してここまで辿り着いた。

森をまっすぐ抜けられれば早いけれど、さすがに大きなキャンピングカーでは無理だ。

ただ、もちろん歩いて森を抜けるよりも迂回してキャンピングカーで走った方が早い。それに森

や川を迂回した道順をカーナビで示してくれるのはありがたい。

「そういえば次にこのキャンピングカーがレベルアップするまでどれくらいなのですか？」

「ああ、確かに最近見ていなかったか……うん、あと千八百キロメートルだ。次のレベルアップまでまだ先は長いなあ」

ジーナに言われ、カーナビのパネルを操作して、ナビからポイントを表示する画面に切り替える。キャンピングカーのレベルが3に上がってからの、これまで走ってきた距離は約千二百キロメートルか。やはり異世界の道は舗装されていないし、道の途中で魔物も現れるため、あまりスピードが出せない。

キャンピングカーを透明化したり、内部の空間を広げられたりする特殊機能がレベルアップによって増えるのがあるがたいけれど、先は長いし、そのことはそれほど意識せずに進んでいる。

異世界でも安全運転が第一なのだ。

「次の街まで結構遠いんだな。そのあとはどこに行くんだ？」

いつものようにキャンピングカーから降り、みんなで晩ご飯や洗濯、野営の準備を手分けして行う中で、カルラが聞いてくる。

「南の方はしばらく森ばかりで、ハーキム村の村長さんもあまり何があるのかは知らなかったみたいだな。次の街に着いたら、そこで情報を集めて、面白そうな場所を探してみよう」

「ホー！」

最初にハーキム村を出発した時は北の方へ進んでぐるっと回って戻ってきたので、今回は南の方へ進んでいる。  
詳しい情報は現地で集める。これも旅の醍醐味だ。面白そうな観光地や名物料理など、何があるのか楽しみだ。



「さて、まずは宿を探そうか」

「ホーホー」

ハーキム村を出てから三日が過ぎた昼ごろ。

ようやくミノバルという小さな街へ到着した。

ここへ来るまでは大きな村や街がなく、情報を集めることはできなかった。道を通る人もほとんどいなかったから、ハーキム村の方からこの近くまで行き来する人はほとんどいないのかもしれない。

ミノバルに着いてすぐに泊まる宿を確保してから、みんなで屋台街を散策する。

「お兄さん達、よかつたら食べていかないか？」

歩いていると、早速四十代くらいの男性に呼び止められた。こちらの世界ではお店の呼び込み競

争も熾烈なので、歩いているだけでガンガン声をかけられるぞ。

「これはなんですか？」

「おつ、お兄さん達、この街は初めてか。こいつはミノバル名物のパンバルだ。薄く焼いたパンにいろんなものを挟んで一緒に食べる料理だぜ」

屋台には、厚さ一、二ミリメートルくらいに薄く焼かれた長方形のパンが重ねられており、その横には野菜を炒めたものや肉を煮込んだものなどが並べられている。

なるほど、元の世界のクレープみたいなものか。確かにこここの他にもいくつか同じ料理を出している屋台があるようだし、この街の名物というのは本当らしい。

名物というのならば、まずは食べてみないと。今はオドリオの街で香辛料を売ったお金や道中で盗賊を討伐した報酬なんかもあって懐が温かいから、お財布のことはあまり気にせず楽しめる。

「それじゃあ、これを五つください」

「まいどー」

そして、みんなにパンに挟む中身を選んでもらう。

お店の人は俺の右肩にいるフー太が翼で選んできたのを見て驚いている。実際には俺の言葉を理解しているのだが、それを知らなければ随分と賢い魔物に見えるのだろう。

「そういえばこの辺りで有名な観光地はないですか？」

「一番有名なのは、ここから南に馬車で二日ほど進んだ場所にあるベラロール塩湖だ。この辺りで

使う塩のほとんどはそのものだ。少し遠いが、この国で一番の塩湖だし、一度は見ておいたほうがいい場所だぜ」

「それはすごいですね。寄ってみますよ」

お店の人は注文した具材を薄いパンにテキパキと挟みながら、俺の質問に答えてくれた。

屋台街でお昼ご飯を食べつつ、情報収集も忘れない。

できあがったパンバルを受け取り、近くのイスとテーブルに座って早速食べる。

「うん、なかなかいけるな。こっちの肉と豆を煮込んだやつは当たりみたいだ」

「こちらのシャキシヤキとした野菜を炒めたものもおいしいですね」

「ホホー♪」

薄いパンは表面がパリッとしていて、中はもちもち。俺が挟んだ具材は少し塩味が強めなので、パンと合わせて食べるとちょうどいいくらいの味付けになっている。

ジーナが食べているのはたつぷりの炒められた野菜、フー太のはシンプルに焼いた肉が挟まれている。

「こっちの腸詰も旨いぜ。コレット、一口交換しようぜ」

「うん！ カルラお姉ちゃん。このお芋もおいしいよ」

カルラが頼んだパンバルの中身は腸詰と野菜。腸詰が結構大きいから、これだけは挟むというよ腸詰に野菜とパンを巻きつけている感じだな。

コレットちゃんの頼んだものはマッシュポテトに塩漬けされた薄い肉が入っているらしい。

みんなで少しずつシェアできるのも、こういった料理の醍醐味である。

「初めて見るけれど、なかなかおいしい料理だ。今度キャンピングカーでも試してみようかな」

ホットドッグのように、焼いたパンに腸詰などを挟む料理はこちらの世界で見たことはあるが、パンバルのように薄く焼いたパンに具材を挟むのは初めて見た。外側の薄く焼いたパンさえ自作できれば、中の具材はいろいろと応用が利きそうである。

インド料理のナンを連想したけれど、どちらかというトチャパティに近いのかもしれない。前にテレビで見たことがあるのだが、インドではカレー店によく見かけるナンよりもチャパティの方がよく食べられているようだ。

チャパティはナンに似ているけれど、小麦粉ではなく全粒粉を使い、発酵はさせずに鉄板や直火で焼くらしい。

ナンの方は発酵させて窯で焼く分、よりふつくらもちもちしているようだ。個人的にはあのもつちり感が好きだから、キャンピングカーで作る時はナンにしよう。

……ただナンを食べるとカレーが食べたくなくなってくるんだよな。一応こちらの世界でもカレーっぽい料理をいろいろと探しているのだが、まだそれらしきものは見つからない。そもそもスパイスが高価だから、そういった料理を開発するのが難しいのかもしれないな。

米も見つかっていないからなあ。そろそろご飯を食べたい欲も限界が近くなってきたぞ……

それにしても、やはり街を回るのは楽しいものだ。どの街もそれぞれの特色があるからな。

そのまま情報収集をしつつ、いろんな屋台やお店を回ってから宿へ帰り、そのあとは宿の晩ご飯を食べてから部屋へと戻った。

晩ご飯で出たこの地方で採れるナスのような野菜もとてもおいしかったな。

「そういや、さつきシゲトがおっちゃんと話していた塩湖ってのはなんだ？」

「その名の通り、塩の湖だよ。普通の湖よりも塩分濃度が高いんだ」

「前に行ったマイセン湖みたいな大きな湖なのかな？」

「いや、あの湖とはちよつと違うんだ。ベラルール塩湖付近は乾燥地帯だから、水もほとんどないらしい。だからマイセン湖みたいに一面が水面なわけじゃないんだよ」

どうやらカルラとコレットちゃんは塩湖を知らないようだ。塩湖とは塩分を多く含んだ湖のことである。地殻変動などで海水が閉じ込められて、それが蒸発して塩分濃度の高い塩湖になったり、岩塩が溶け出して塩湖になったりした場所もあるらしい。

どこの塩湖にも共通して言えるのは、川のように水が流れ出ていく場所がないため、塩分が排出されずにどんどん濃縮されていくということ。雨があまり降らない乾燥地帯であれば、最終的に湖一面が塩の結晶で覆われるわけだ。

「それにベラルール塩湖は他の塩湖とはちよつと違うらしいんだ。おつと、これ以上は実際に現地に

ついてからにしようか」

これも屋台の人や市場の人達に聞いた話だから、実際には見てみないとわからない。元の世界のように検索すればすぐに画像が出るのも便利だが、初めて現地に行つて自分の目で見る景色は感動がより大きい。あとは現地に到着するのを楽しみにするとしよう。



昨日は朝からミノバルの街を出発した。あそこはそこまで大きな街ではなかったので、一日で街を一通り見て回れた。

キャンピングカーのおかげで、馬車では数日かかる道を一日で到着することができ、ベラルール塩湖のすぐ近くにあるベラルール村の宿に泊まった。

ベラルール村は、自然に囲まれたのどかな村である。ベラルール塩湖へは俺達のように観光に来る人達も多いそうなので、村の中に観光客用の宿があった。

「おつ、あそこが検問所みたいだ。村の人に聞いた通りだな」

そして今日は朝からベラルール塩湖の観光へ来たのだが、そこへ辿り着く前に検問所がある。というのも、ベラルール塩湖では街の商業の要となる塩を採掘していて、勝手に塩を採掘して持ちだすことは犯罪であり、それをチェックするために国が管理する検問があるのだ。

もちろん村ではベラルール塩湖で採れた塩を販売しているので、村を出発する際は改めて購入していくでしょう。

「……ふむ、四人とフクロウの魔物か。目的は観光だな？」  
「はい。今日中に戻ってきます」

街の壁ほど立派とは言えないが、他の村よりも頑丈がたくそうな木の柵さきに囲まれている場所に検問所があり、武装した門番がここを通る観光客をチェックしている。

国が管理しているほど重要な場所というだけあって、結構人がいるな。

俺達は種族が全員バラバラで魔物のフー太までいるからどうしても目立ってしまう。門番の人も怪訝けげんな目で俺達を見ていた。

龍人族のカルラが相変わらず注目されるが、外套がいのうを外さないと怪しまれてしまう。一応は国が管理している場所だし、カルラの情報をどこかに漏らすことはないと思いたい。

「問題なさそうだな。塩の採掘場を見学するのはいいが、邪魔はしないように」  
「はい、わかりました」

いくつかの質問を受けたあと、木の柵の内側へと入れてもらう。

基本的には持ち物が少なく、塩を持ち運べなさそうなら、それほどチェックされる時間がかからないというのは昨日聞いた通りだ。俺達がチェックを受けている間、塩湖から出てくる馬車があったけれど、荷物を馬車から出して長時間調べられていた。

塩を商品として管理する以上、どれだけの量を持ちだして、どこに持っていくかなどを細かく管理するのは当然か。

何はともあれ無事に入ることができてよかった。

「うわあ〜すっごいね！ 一面真っ白だよ！」

「これは壮観さうかんですね。これすべてが塩なのですか」

「こいつはすげえな！」

「ホー、ホーホー！」

コレットちゃん、ジーナ、カルラ、フー太の順に感嘆かんだんの声を上げる。

今俺達の目の前には白い大地がどこまでも続いている。地平線まで続いていく純白の塩の大地はまるで雪原せつげんのように輝いており、陽光ようこうを反射してキラキラと眩しい。空は澄み切った青で雲一つない。その青色と白い湖面の境目がまるで溶け合っていくかのような錯覚さつかくを覚える。

一歩足を踏み出すと、ザクツと乾いた音がして硬く締まった地面が確かな感触を返してきた。真っ白な塩の大地を歩くという初めての経験が記憶の中に刻み込まれていく。

「これまでいろいろな景色を見てきたけれど、このベラルール塩湖も本当に美しい景色だな。それにしてもずいぶん大きな塩湖だ」

塩湖という場所を訪れたのも、こういった景色を見るのも初めてだ。あの真っ黒なトレドール砂漠とは対照的に、真っ白な景色が一面に広がっている。

「シゲトお兄ちゃん、本当に地面が全部お塩だよ」

「ぺっぺっ、マジでしょっぺえな」

コレットちゃんとカルラが地面の真っ白な塩を手取る。カルラは早速その塩を舐めているようだ。ここは多くの人が通っている場所だから、もう少し奥へ行った方が綺麗だと思っけれど、すぐに舐めてみたくなる気持ちも少しわかる。

さっきの検問所から少し歩いてきたから見られてはいないだろう。持ち帰るわけではなく、少し舐めるくらいなら許されると思うが。

「この辺りの地域の塩は大体このものが使われているらしいね。これだけの量だから、結構遠くまで流通していてもおかしくない」

「ホホーホー」

さすがにこれほど大規模な塩湖がこの世界にたくさんあるとは思えない。もしかすると、これまで通ってきた村や街で使われている塩はすべてこの塩湖のものだったのかもな。

キャンピングカーでもかなりの道のりだったし、輸送料を考えたら塩が高価になってしまうものも仕方がないのか。

「……そういや木とかの植物がなんもねえな」

「地面が塩だから植物なんかは育たないんだよ。それに植物を食べている虫や動物や魔物も棲めない環境なんだろうな」

カルラの言う通り、この塩湖は見渡す限り真っ白で緑色の植物なんかはまったく存在しない。

死海しかいという元の世界の塩分濃度が非常に濃い塩湖も、動物や魚などが生存できないことから、死の海という名前がつけられたと聞いたな。

「あれっ、これは何かな？」

「ホホー？」

「これは塩の結晶だよ。長い年月をかけてこういった形になっていったんだろうね」

「すごいですね。自然にこのような形になるのですか」

まずは塩の採掘場を見学するためにそちらへ向かって進んでいる。その途中で三十センチメートル四方の白い塊かたまりをコレットちゃんが発見した。

その塊は、自然にできたと思えないくらい綺麗な正方形の白い結晶が集まってできている。

俺も詳しくは知らないが、限界まで溶け切った塩水から水分が蒸発じょうはつする時は、規則正しく結晶化していくため、このような形になると、どこかで見たことがある。

他にもピラミッド型の塩の結晶もできるらしい。化学について詳しく知らない俺にとって、塩がこんな形になることはまるで魔法みたいに思える。

ジーナの言う通り、自然の力というものは不思議でとてもすごいものだよなあ。

「馬車の轍わだちを通っていけば塩の採掘場へ行けるみたいだ」

真っ白な塩の大地には塩を運び出すためと思われる馬車の轍が続いている。きつとさっきの馬車

もそこから塩を運んできたのだろう。

採掘場は入口から少し離れているらしく、あそこまでは歩かないといけないようだ。塩湖の真ん中のほうではなく、周囲をぐるっと回っていくらしい。

「中心の方へ進むと真っ白ですから、方向感覚がおかしくなりそうですね。奥の方にある大きな山がなければ迷ってしまいそうです」

この塩湖はマイセン湖ほど大きいわけではないけれど、それでも地平線がずっと続いているように見える。奥の方にある山が大きな目印になりそうだが、それ以外は何も無い。

「でも俺達の場合はキャンピングカーがあるし、フー太に空から見てもらえれば大丈夫だよ」

「ホホー！」

ジーナにそう返すと、フー太が任せておけと言うかのように返事をしてくれた。

「うおっ、こんなふうになっているのかよ！」

「綺麗だね〜！」

カルラとコレットちゃんの声が響く。

馬車の轍を通ってしばらく歩いていくと、そこには高さ数メートルくらいの壁がそびえ立っていた。そしてそれはただの土や岩の崖ではなく、側面がキラキラと光り輝く、塩の壁であるようだ。

その前にはたっくさんの人がいて、壁から塩の塊をツルハシで切り出し、形を整えたあと馬車へと

積んでいく。ここから塩の塊を運び、細かく砕いて普段使っている塩のように加工していくのだろう。

検問所で言われたように邪魔をしないくらいの距離を保って見学する。観光をする時のマナーは大事である。

「……なんだか白色ではなく、少し青くないですか？」

「ああ、それがこのベラルール塩湖の塩の特徴らしい。下の白い塩にもほんの少しだけあの水色の塩の結晶が混ざっているみたいだよ」

奥にあるキラキラと輝く塩の結晶の壁は青みがかっており、水色のように見える。

「あの壁の塩はベラルール塩と呼ばれていて、足元にある白い塩よりもまろやかで旨みがあるらしいね」

村で聞いた話によると、このベラルール塩は普通の塩よりも高級品として販売されているらしい。

「ですが、どうしてこんな色をしているのでしょうか？」

「塩の色が変わるのはいろんな理由があるらしいけれど、この地域独特の何かが作用しているのかもね。俺の故郷ではピンク色の塩とかもあったな」

「ホホ〜!？」

ピンクソルトはヒマラヤ山脈周辺で採掘される天然の岩塩だ。確か鉄分を豊富に含んでいるから美しいピンク色をしているんだっけ。

ここの塩もなんらかの成分が混ざってこんな色になっているのだろう。味も普通の塩とは異なるらしいから、あとで料理に使うのが楽しみである。

キャンピングカーのおかげで元の世界の香辛料や調味料には困らないわけだが、せっかくならこちらの世界特有のものも試してみたい。もしも味をみておいしかったら、たくさん購入していくでしょう。

「わあ、気持ちいいですね」

「ホ〜ホ〜」

塩の採掘場をしばらく見学してから、今度は塩湖の中心の方へ向けて進んでいく。

隣にいるジーナとフー太も楽しそうだ。

採掘場には俺達以外の観光客もちらほらいたが、ある程度進むと誰もいなくなったので、キャンピングカーを出して進む。何もない真っ白な世界をキャンピングカーで走るの、なんとも言えない爽快感がある。

「ここは地面が真っ平らなのか。あの黒い砂漠の時は小さな丘みたいなのがずっと続いていたよな」

「あの時はずっと暑かったし、何回もキャンピングカーが止まっちゃって大変だったよね」

後ろにいるカルラとコレットちゃんの言う通り、トレドールレ砂漠をキャンピングカーで走ったの

も今となってはいい思い出だ。

こちらの方は硬い塩の大地なので、あの時のように車のタイヤが空回るようなことはない。平らな道がひたすら続いているからとても走りやすい。

一つだけ大変なのは、一面が真っ白だから陽の光が反射してだいふ眩しいことだ。あんまり長時間走っていると目がやられてしまいそうである。サングラスが欲しいところだな。

しばらく進んだところでキャンピングカーから降りる。

「ホホー！」

「あんまり遠くへ行かないようにな」

一面の真っ白な世界に興奮したのか、早速フー太が空に羽ばたき周囲を飛び回っている。キャンピングカーも白いから、この場所を見失わないように注意してもらわないといけない。

俺もこの広大な白い大地を空から見たいから、あとでフー太とカルラに頼んで、以前オアシスでやってもらったように縄と木の板を結んだブランコに乗せてもらって、空中散歩を楽しもう。

「本当になんにもねえなあ。まあ静かでもいいけれどさ」

「確かに森の中だと、もっと音がするかもな」

真っ白な空間で生物もいない場所。

今日は風もないから本当に静かだ。まるでこの世界には俺達以外存在しないような感覚に陥ってしまう。

「なんだか地面に模様がありますね」

「水分が蒸発する時こういう形になるんだろう。詳しいことは俺にもわからないけれどね。ここま  
で真つ白だと、まるで雪が降り積もったみたいだ」

「シゲトお兄ちゃん、雪ってなあに？」

「白くて冷たい氷の結晶のようなものだよ。寒い地方だと雨みたいに空から降ってくるんだ」

「へえ、すごいね！」

そういえばこの異世界へ来てから雨は何度も降ったことがあるけれど、雪は降ったことがない。

この辺りは比較的暖かい気候だから雪は降らず、みんなも見たことがないのかもしれないな。もっ  
と寒い地方へ行けば雪が降っているのだろうか。

久しぶりにスキーやスノーボードを楽しみたいものだ。この異世界でも雪が多く降る場所があるのか、  
今度情報を集めてみよう。

「さて、そろそろお昼にしようか」

ぼちぼちお腹が空いてきたから、昼ごはんの時間だ。

「さて、今日のお昼はシンプルな魚の塩焼きと野菜炒めだよ」

キャンピングカーの横にテーブルとイスを出し、料理を並べる。

最近の料理に比べるとすぐくお手軽なメニューだけれど、今日の主役はこの水色のペラロール塩だ

からな。実はこっそりと村で少量だけ購入しておいた。味がよければ村を出る時にたくさん買いつ  
けるとしよう。

「……青色の料理ってのは初めて見るな」

「そういえば俺も見たことがないかもしれない。あんまり自然界にはない食材の色なのかな」

野菜炒めの方はすでに塩が溶けていて気にならないけれど、魚の塩焼きの方はこんがり焼き上  
がった川魚にペラロール塩をかけたので、魚の表面がほんのりと青くなっている。少し粗めの粒なだ  
けあって、色味がしっかり見えるようだ。

カルラの言う通り、俺も青い食材というのは元の世界を含めて食べたことがない。昔、ネタで  
売っていた青色のカレーを食べたことがあるけれど、あれは自然の色ではなさそうだ。

……青色は食欲を減退させる色らしいけれど、料理は見た目よりも味が大事である。

塩の味の違いがそこまでわからないかもしれないから、塩焼きの半面には普通の塩をかけている  
ので、食べ比べてみる。

「……うん、普通の塩よりも味が深い気がするな」

「ええ、塩が違うだけでも意外と変わるものですね。見た目はちょっとあれですが、こちらの方が  
おいしいです」

魚の塩焼きを食べ比べてみると、同じ焼き具合の魚でも味が異なった。

俺がキャンピングカーに積んでいた塩は普通の食卓にあるような塩だったのだが、このペラロール

塩に比べるとしょっぱいだけという味だ。ペラロール塩の方はしょっぱいだけでなく、旨みやほのかな甘みなども感じられる。

たぶんこれだけ違うのなら、目をつぶって食べてもわかりそうだ。淡白な塩焼きだからこそ、より一層その違いが感じ取れる。

「野菜炒めの方もうめえな。タレで食べるのもいいけど、こっちもいけるぜ」

「うん、すっごくおいしいね」

カルラとコレットちゃんもペラロール塩の方が気に入ったらしい。野菜炒めもペラロール塩を使った方が野菜本来の甘味をより自然に感じられる。野菜は元の世界のものより、こちらの世界のものが質がいいから、かける塩がいいとより一層おいしく感じた。

「色の見た目さえ気にしなければこちらの塩の方がおいしいな。村へ戻ったら、多めに購入しておこう」

ジーナが言っていた通り、見た目はちよつとあれかもしれないから、うまく工夫してあまり青みが見えない料理に使うようにしてみよう。

「さて、そろそろ村まで戻ろうか」

「ホーホー」

真っ白な塩の大地にテーブルとイスを置いて食べる昼食はいいものだった。

食後はこちらの世界で売っていたボールのような遊具を使って、みんなで一緒に遊んでいたから、結構な時間が経っている。

広いからボールを追うのも大変だったし、一面真っ白だから遠近感がちよつとおかしくなりそうだったな。

だけど他の場所のように危険な魔物が棲息していないから、それほど気を張らずに過ごせた。

「広くてとっても楽しかったね！ また来たいなあ〜」

「のんびりと遊んですごしたい時にはいい場所だ。また来ようね」

「やったあ！」

普段広い場所に泊まっつてのんびりと過ごしている時も、キャンピングカーの外であれば多少周囲を警戒して遊んでいるが、ここではその必要がないのはありがたい。

検問所では今日中に戻ると伝えていたので、あまり遅くならないようにしよう。

特に大きな問題もなく、無事に検問所まで近付いたところでキャンピングカーを降りた。

「ふむ、問題ないな。通っていいぞ」

「ありがとうございます」

荷物がなから帰りの検問はすぐに終了した。塩は採取してキャンピングカーに収納することはできるのだが、それは犯罪になるので、もちろんやらない。

「ずっと真っ白で、とっても綺麗だったよ」

「塩の採掘場にあった青い塩の結晶もキラキラと輝いて美しかったですね」

「ほう、楽しんでくれたのなら、何よりだ。時期や時間帯によっていろんな景色が見られる場所だから、またぜひ来てくれ」

コレットちゃんとジーナが楽しそうにそう言うと、門番の人もどことなく嬉しそうな表情を浮かべた。自分達が守っている場所を褒められて悪い気はしないのだろう。

「ええ、またお邪魔させてもらいます」

そのまま無事に昨日泊まった宿のあるベラルール村まで戻ってきた。

「宿の晩ご飯もおいしかったな」

「ホー！」

今日初めて塩湖を訪れるから、あえて昨日はこの宿の晩ご飯を食べていなかったのだ。なので今日はいろんな料理を頼んでみた。

そして晩ご飯を食べ終わり、今は部屋でのんびりとくつろいでいる。

そこまで大きな村ではないが、観光客が多く訪れるせいか、結構な数の宿があり、俺達全員が泊まることができるとは大きめの部屋もいくつかあった。

「地域によって様々な料理がありますね。この辺りで収穫できる野菜の塩漬けや魔物肉の塩漬けなど、とてもおいしかったです」

「だけどちよつとしょっぱすぎだぜ。確かに普段使っている塩よりも味は少しまろやかだけれど、あれはいくらなんでも塩をかけすぎだな……」

「うん、ちよつとだけしょっぱかったね……」

「サービスの意味も含めて塩を多めにかけたのかもしれないよ。まあ、俺もちよつとしょっぱく感じたけれど」

宿のサービスなのか、この辺りでは塩を多めにかける文化なのかはわからないけれど、晩ご飯の料理は少し塩味が利きすぎないように感じられた。あるいは他の地域だと塩もそこそこ高価だからこれまでの料理の塩味が薄すぎたという可能性もある。

するとカルラが俺に尋ねてくる。

「シゲト、そういや次はどこへ行くんだ？」

「もう少し村やこの付近の街で情報を集めてから決めようと思っているよ。それとせっかくこのベラルール塩湖まで来たから、もう一つ見たいものがあるんだ」

「見たいものってなあに？」

「それは実際に見られるようになったらのお楽しみだよ、コレットちゃん。でもある程度条件が整わないと見ることができないから、見られたら運がいくらに思っておくのがちょうどいいかもしれないな」

さつき宿の人から聞いた話によると、複数の条件が重なった時にだけ見ることが出来る特別な景

色があるようだ。実は元の世界でもそういった景色は見ることができ、このベラロル塩湖も条件を満たせば同じようになることを少しだけ期待していたのだ。

できれば見たいけれど、こればかりは運次第になりそうである。最近盗賊を捕らえたし、徳を積んでいる気がするから、運よく条件が揃うことを期待しよう。

「この辺りには他の村や街もあるみたいだから、のんびりとその辺りを巡りつつ、数日間はこの村を拠点にして回ってみようか。キャンピングカーのレベルも上げたいから、新しい道を通ることも意識していこう」

「ホホー」

今は時間とお金にある程度余裕があるから、しばらくはのんびりと過ごすとしよう。



「ホーホー」

「ありがとう、フー太。これくらいで大丈夫だよ」

次の日、ベラロル村から少し離れた村を訪れて、そのまま大きな川へと移動してきた。そしてその川で釣りをしているのんびりと過ごすつもりだ。たまにはそれほど移動をせずにいたらだと過ごすのも悪くない。

ある程度開けた場所にキャンピングカーを出したので、ここなら魔物が襲ってきてもすぐに気付けるだろう。

「へえ、そんなちっこい虫がエサになるのか」

「ああ。だいたいはこんなふうに石の隙間にいることが多いよ」

カルラは小さな虫を見て驚いている。

今は釣りの前段階でエサとなりそうな虫をみんなで探していて、相変わらずミニミズや昆虫の幼虫などを探すのはフー太が一番うまかった。

「カルラは釣りが初めてなの？」

「ああ。川の魚は何度も獲ったことがあるけれど、爪で直接突き刺しちまうからな」

「……なるほど。確かにそっちの方が早そうだ」

鋭い爪を伸ばして見せるカルラ。あれで銚ちゆうのように魚を突くのか。

「前にもマイセン湖でやったよね」

「ええ、久しぶりですね」

「今回は川釣りだから少し違うかもしれないよ」

コレットちゃんとジーナは以前にマイセン湖を訪れた時に釣りをしたことがある。

ただ、あそこは綺麗な湖だったから、上から魚がエサに食いつきそうところがよく見えた。こ

の川もすぐ綺麗だけれど、流れがある分、前よりも魚の動きは見えにくいかもしれない。

「こんな感じで針にエサをつけるんだ。あとは川に釣り糸を垂らして魚が掛かるまで待って、食いついたら釣り竿を上げるだけだよ」

「よっしゃあ、いっぱい釣るぜ！」

当然カルラもミミズや幼虫などをなんの躊躇ためらいもなく手で掴む。コレットちゃんとジーナもそうだったけれど、この異世界に虫を怖がるような女の子はほとんどいないのだろうか。

俺も魔物の解体作業をできるようになったし、虫を手取るくらいでは何にも感じなくなった。この世界に転移してきたこと比べるとだいぶ遅おそくなったものである。

釣り竿はキャンピングカーに一つしか積んでなかったもので、他の釣り竿はこちらの世界で購入した。前は長い木の棒に釣り糸を結んだ釣り竿を使ったけれど、今はお金に余裕があるから、糸も竿も購入してある。

キャンピングカーに積んであった釣り糸ほど細くて丈夫ではなかったけれど、そこまで大物を狙うわけではないからこれで十分だ。

元の世界から持ってきた釣り糸は、前に作った魔物の警戒用の鳴子なるこのように、釣り以外の場面でも使えることがあるだろうから、できるだけ節約しておく。

「釣った魚は塩焼きにしてもいいですし、フライや天ぷらもおいしいですから迷いますね」

「僕は前に食べたムニエルと南蛮漬なまはんづがいいなあ」

「おっ、そっちはまだ食べたことがない料理だな。シゲト、俺もそいつが食いたいぜ」

「はいはい。まずは魚が釣れてからだよ」

「ホーホー」

みんなは、釣りを始める前からすでにどうやって魚を食べるかを考えているみたいだ。もちろん俺もだが、やはり釣りをする時はそのあとのご飯が楽しみなのである。

前に釣ったり、市場で購入したりした魚はほぼ使い切ってしまったから、できるだけ多く確保しておきたい。

釣った魚の料理方法を考えるだけで捕らぬ狸たぬきの皮算用かわざんようにならないよう、たくさん釣れることを祈るとしよう。

「やったあ、また釣れたよ！」

「相変わらずコレットちゃんは釣りがうまいな。うん、これも食べられる魚だ」

コレットちゃんが引き上げた釣り竿の先には、ピチピチと跳ねる三十センチメートルほどの茶色い魚がいた。これは異世界にいる毒のない川魚だ。

マイセン湖で旅をしていたころよりもこっちの世界の食材にも詳しくなってきた。ただそれでも毒があるかわからない魚はまだ多いので、知らない魚を釣ったら街のお店の人に聞くようにしている。

コレットちゃんは獣人で五感が優れているから、手に持った釣り竿の感覚で魚がエサに食いつい

た瞬間がわかるらしい。狩りや釣りにとはとつても向いているみたいだ。

「やはり川の流れがあると少し難しいですね。それでも何匹かは釣れましたが」

「俺もコレットちゃんには及ばないけれど、ちよつとは釣れたかな」

目がいいジーナは上から魚の動きを見てうまく魚を釣っていたけれど、川だと流れがあるからそこまではっきりと見えないらしい。それでも俺よりも一匹多い三匹を釣り上げていた。

「だあくそ！ また駄目だったぜ！」

「カルラお姉ちゃん、魚がエサに食いつくまでもう少し待った方がいいよ」

「魚もいきなり食いついたりせずちよつとエサをつついてくるから、魚がしっかりと食いついた瞬間に上げるんだ」

カルラのほうは、残念ながらもまだ一匹も釣れていない。

さつきからコレットちゃんと俺が何度かアドバイスをしているのだが、どうしても魚がエサをついたらすぐに釣り竿を上げてしまう。確かに釣りはタイミングが結構難しい。

「よっしゃあ、やつと釣れたぜ！」

「ホー！」

「やりましたね」

「やったね、カルラお姉ちゃん！」

「おう！」

何度も逃げられていたカルラだったが、ついに魚を釣り上げることに成功した。

初めての釣りでボウズになることはよくあるから、一匹でも釣れて本当によかったよ。

「いやあく実際に釣れてみると嬉しいもんだな。でもやっぱし俺に釣りは向いてねえみたいだ」

「自分が楽しめる方法で楽しめばいいさ」

「ホーホー！」

川での楽しみ方は人それぞれだ。別に無理に釣りをさせる気もない。

それにフー太も釣りはできないから、さつきから川の上より魚を急襲して狩っている。ご飯となる魚を確保できれば、方法はなんでもいいのだ。

そんな感じで今日は一日中のんびりと川で過ごし、おかげで魚もだいぶ確保できた。街で売っている魚は干物や塩漬けにしたものが多いから、たまに釣りをして生魚を確保するのも気分転換と食費の節約になっていいな。

ただ川魚だと同じような魚ばかりになってしまうから、今度は海に行きたいところだ。マイセン湖やこの川とは異なる魚や海の幸を楽しんでみたい。



「まさか本当に雨が降ってくれるとは思わなかったな。やっぱり俺達はだいぶ運がいいのかもしれない

ない」

川でのんびりと過ごした翌日、俺達は近くの街で買い物をした。そして今日は久しぶりに雨が降っているので、移動はせずに宿でゆっくりと過ごすことに決めたのだ。

「ホー？」

「雨なんて面倒なだけだと思うけどな。なんで運がいいんだ？」

「その理由は明日になればわかるよ。でも確かに普段は面倒だよなあ」

カルラの言いたいこともよくわかる。これまでに雨に降られたことは何度かあるが、やはり旅をしている時の雨は面倒なものだ。

道がぬかるんで泥は撥ねるし、視界が悪いから事故の原因にもなる。小雨くらいならキャンピングカーで走れるけれど、大雨となると事故のもとにもなるから停滞せざるを得ない。

異世界は道が整備されていないから安全第一だ。

「洗濯物も乾かないものね……」

「それに観光できる場所を巡る時は晴れている方がいいですからね」

コレットちゃんとジーナの言う通りである。

キャンピングカーに洗濯機はついていないから、いつも服は手で洗ってからロープを木などに結びつけて、そこに服を干しているのだが、雨だとそれもできない。空間拡張したキャンピングカーなら室内干しはできるけれど、外で干した服の方が着心地がよく感じるのだ。

それに雨だと旅をしている時にすばらしい景色が残念なことになる。幸いこれまで訪れた大きな観光地で雨が降ったことはないけれど、旅に雨は天敵なのだ。

しかし、そんな雨も今回だけは俺達に味方してくれたらしい。

今日は宿でのんびりと過ごして明日を楽しみに待つとしよう。

「それでシゲトは何を作っているんだ？」

「トランプみたいな俺の故郷の遊具だよ。シンプルだけれど結構面白いんだ」

「本当ですか、私も手伝いますよ」

「僕も！」

こういった雨の日や時間のある時のため、みんなで遊べるトランプを以前に自作したのだが、今日は雨で時間があるから、以前に購入しておいた木の端材を使ってある物を作っている。

みんなも手伝ってくれて、木を数センチメートルほどの丸い形に切って、片側を黒色、反対側を薄い赤色に塗っていく。

本当は赤色ではなく白色にしたかったけれど、塗料の中でも白色は結構高かったから、赤色で代用した。まあぶっちゃけ色が二種類になれば何色でもいいからな。

「完成だ、これがリバーシだよ」

「ホホ〜」

八×八の六十四マスに区切ったボードと黒色と赤色の駒。シンプルな作りだから、トランプを作

る時よりも簡単にできたな。

「どうやって遊ぶの？」

「真ん中に四つの駒を交互に置いて、そこから順番に自分の色の駒を置いていくんだ。そして縦横斜めに挟まれた駒はひっくり返って自分の色になる。全面が埋まった時点で駒の多い方が勝ちだよ」

俺はパチパチとお手製のリバーシをひっくり返して見本を見せる。リバーシのルール自体はともシンプルだ。

「面白そうですね、やってみたいです」

「僕も」

「俺もだぜ」

「それじゃあ説明もかねてやってみるか」

まずは俺とジーナで試してみることになり、パチパチと宿の部屋の中に駒をひっくり返す音が響く。

「そこだとたった一つしか返せないのに本当にいいのですか？」

「ああ、大丈夫だよ」

初めてリバーシをやるジーナは、そのタイミングで一番駒をひっくり返せる場所へ駒を置いていく。

対する俺はひっくり返せる数が少なくとも盤面の端っこを優先して狙う。まずは説明だからな、ジーナには身をもって知ってもらおうとしよう。

「……私の負けです」

盤面が駒で埋まると、そこには俺の駒である黒色ばかりとなった。数えるまでもなく俺の勝利である。

「今のでわかったと思うけれど、このゲームは後半での逆転が容易なんだ。だから最初は自分が有利となるポジションに駒を配置することが大事になる。特に四つの角は一度取ったらもうひっくり返すことができないからね」

ルールは非常にシンプルだけれど、実際はかなり奥深いのが、このリバーシというゲームである。ジーナには悪いが、わかりやすく定石を説明することができたな。

「面白そう。僕もやる！」

「今度は俺の番だぜ！」

「もう一度やらせてください。次は負けません！」

「ホーホー！」

みんなリバーシに興味を持ってくれたようだ。もう一セットくらい作ってもいいかもしれないし、他にも将棋やチェスなんかのボードゲームを作ってみてもいいかもしれないな。

異世界にはテレビゲームなんかないし、娯楽はとても少ない。旅をしている中でこういった停滞日も楽しめるのはいいことだ。焦らずのんびりと旅をしよう。



翌日、雨はすっかりと止んで、綺麗な青空が広がっている。

おそろくこれで条件を満たしたはずなので、俺達はキャンピングカーに乗って、再びベラロール塩湖を訪れた。

「ああ、君達か。また見学かい？」

「はい、見学でお願いします」

検問所の人も俺達のことを覚えているようだ。

……まあ、これだけ目立つグループならば覚えられてしまっているのも当然か。

「明日の昼くらいまで過ごしたいのですが大丈夫でしょうか？」

「ああ、そういうことか。明日の昼までならちようど一日だから問題ないぞ」

朝からベラロール塩湖まで移動してきて今は昼過ぎ。一日経つまでにここへ戻ってくれば問題ないそうだ。この塩湖で一夜を明かすことについて理由を聞かれないところをみると、俺達と同じことを考えている人も多少はいるのかもしれない。

「よかったです。ちなみに昨日は雨でしたけれど、例のアレは綺麗に見えそうですか？」

「うむ、塩湖の中央へ少し進むとよく見えるぞ。今日ここへ来た観光客は運がいいようだな」

「おおっ、やっぱりそうなんですね！」

俺の質問に門番は快く答えてくれた。

どうやら予想通り条件が整っているらしい。三日待ただけで見られるとは運がいい。

みんなにはまだ秘密にしているけれど、きつと驚くだろうなあ。

「うわあ〜すっごいね！」

「すげえ！ なんじゃこりゃ!？」

「これはすばらしいですね！」

「ホー、ホー！」

今日は塩の採掘場ではなく、塩湖の中央へ向かって歩いていった。

進んですぐの場所は前に見たベラロール塩湖と変わらなかったが、さらに先へ進むと、前に訪れた時とはまったく違った光景が広がっている。

「これは壮観だな。こんなに美しい景色が自然の中に存在しているなんてすごいことだよ！」

前に訪れた時は真っ白な塩の大地が続いていて驚いたが、今この場所には、それとは異なる景色が広がっていた。

昨日降った雨により、雨水の薄く張った塩の大地は完璧な鏡面状態となり、どこまでも透き通った青空と白い雲がそのまま足元へ映し出されている。

遙か先まで続く水面はどこまでが空でどこまでが塩湖なのか、区別がつかなくなりそうだ。裸足で歩いたびに水面が揺れ、しばらくするとそれが収まって自分の姿が逆さまに浮かぶ。

「この塩湖は地面が平らになっていて、真ん中の方は入口よりも少しだけ低くなっているから、昨日みたいに雨が降ると中央の地面に均一に雨水が溜まるんだ。そうすると今見ているみたいに鏡のように空を映し出すんだよ」

「ホ〜」

「こんな景色は初めてです。本当に世界は広いですね！」

青い空と白い雲が空だけでなく地面にも無限に広がっているこの光景は、もちろん俺も初めて見る。ジーナの言う通り、世界は広く、自然はとても偉大だ。

「すげえな。シゲトがしばらく周辺に留まりたいって言っていた理由がよくわかったぜ」

「うん。こんなに綺麗な景色なら絶対に見たいよね」

カルラとコレットちゃんも感動している。

そう、この景色はとも見たかったのだが、村の人に詳しい話を聞いたところ、複数の条件が重ならないと見る事ができないようだった。

まず雨が降ること。そもそも先日のように真っ白な大地になっているということは、この足元に

ある水がすべて蒸発しているということ。つまり、雨の降る量よりも蒸発する量が多いということ。は雨自体が少ない地域だとわかる。

さらにその雨の量が少なすぎても多すぎてもこの景色は生まれにくい。塩の大地からちょうど数センチメートルだけ水が張った状態でないと、こんな感じで鏡のような状態にはならないよ。うだ。

そして今日のように風がほとんどなく、晴れた天気であること。風が強いと水面が揺れて綺麗に見えないのだ。さらに、青い空が見えている晴れの日でないと景色の美しさも半減してしまうし、快晴よりも少し白い雲があった方が映えるといった、非常に面倒な条件もある。

「本当に運がよかったよ。俺の故郷にも似たような場所があるんだけど、ここ以上に条件が厳しいらしいよ」

南米のポリビアにあるウユニ塩湖という場所の鏡張りの美しい景色は、きつとネットの画像を見たことがある人も多いはずだ。

他にアメリカのソルトレイクでも同様の景色が見られるらしい。だが、ウユニ塩湖は日本の富士山と同じくらいの高度にあり、高山病対策が必須だ。

さらに下手をすると雨季でも一ヶ月くらい条件が揃わない時もあるらしいし、何よりポリビアやアメリカは日本からだると遠すぎる……

いつかはどちらかに行ってみたいと思っていたけれど、まさか異世界でそれに近い景色を見るこ

とができるとは思わなかったぞ。

「この辺りだとまだ観光客がいるみたいだから、俺達はもう少し奥の方へ行ってみよう」

今日はこの景色が見られる絶好のチャンスということもあって、以前に来た時よりも多くの観光客がいた。せっかくなら誰にも気兼ねせずにこの景色を楽しみたいので、人の目につかない場所まで行き、キャンピングカーに乗ってさらに奥へと進む。

「すごいな、まるで空の中を走っているみたいだ」

「ホーホー」

水の張ったペラロール塩湖をキャンピングカーで滑るように疾走していく。一面が空の青と雲の白に塗りつぶされた水面を走っていくと、不思議な感覚に包まれた。

さっきペラロール塩湖の中に佇むキャンピングカーを見ただけで、まるで一枚の美しい絵画のようにも見えた。まあこの景色ならキャンピングカーだけでなく、どんな物でも美しく見えるかもしれないけれど。

ある程度進んだところでキャンピングカーを停車して外に出てみた。

「これはまた絶景だな」

「ホーホー」

俺達の頭上でフー太が飛び回る。フー太もいつも以上に感動して興奮しているようだ。

「こんなに綺麗な景色があるんだね！」



「まるで私達だけ別の世界にいるみたいですね！」

コレットちゃんとジーナの言う通り、ここだけが別世界のようにも見えるほど、日常の景色とは異なっている。俺は元々別の世界から来たから異世界の異世界になるのか。

「すげえな。そういやこの水もやっぱりしょっぱいのか？」

「ああ。限界まで塩が溶けているからものすごくしょっぱいと思うよ。この雨水が蒸発すると、前に見た景色へ戻るんだ」

カルラの見ている足元には数センチメートルほどの雨水が溜まっている。今はみんな裸足で外に出ているから足元がひんやりと冷たい。

塩湖は塩でできているから、当然雨が降ると塩が溶けていく。しかし、一定以上溶けるとそれ以上で溶けることはなくなる。確かその状態のことを飽和水溶液（ほうすいごうえき）というんだっけ。

そのため、塩の大地がすべて溶けることはなく、また晴れの日が続けば水分が蒸発して、先日のように真つ白な大地へと戻るのだ。

長い間それを繰り返すことよって、前に見た塩の結晶ができあがっていくのだろう。

「おおくキャンピングカーの上から見る景色でも違うものだな」

キャンピングカーの上から見ると、青と白の世界がずっと遠くまで広がっているように見えた。

一か所だけ大きな山が見えるのだが、その山も水面の鏡によって綺麗に反射している。あの山がなかったら、見渡す限りの青と白の世界でここが現実なのかを疑ってしまうほどだ。

それほどまでにこの光景は幻想的（げんそうてき）である。もしかするとこの世界に来てから見た景色の中で一番印象に残った場所かもしれない。

「夕日が落ちる景色もすばらしいですね」

「こんな場所があるんだね」

「ああ。すっげ〜綺麗だぜ」

「ホホ〜」

今日はこのペラルロル塩湖に泊まるため、美しい景色を見ながら、のんびりと過ごした。今はキャンピングカーの上にみんなで座ってこの景色を見ている。

夕日がゆっくりと沈んでいく様子は、まるで世界が二つに分かれたかのような光景だった。

太陽が地平線に近付くと、空は燃えるようなオレンジから深い紫、鮮やかなピンクへとグラデーションを描き、それがそのまま湖面に映り込んでいく。地平線は溶け合い、上と下の境目が消えてとても幻想的な光景だ。

それまでは青と白だけの世界だったが、今はそれに新しい色が加わって、より一層水面のキャンパスが鮮やかになっていく。

そしてそのまま日が沈んでいき、ゆっくりと暗くなっていった。

「すごかったです。ここに来ることができて本当によかったですね！」

「うん、僕も今日見た景色は絶対に忘れないよ！」

「ああ、俺もだぜ！」

ジーナとコレットちゃんとカルラは、このすばらしい景色をしっかりと記憶の中に刻み込んだようだ。もちろん俺とフー太でもある。

「俺達が滞在している時に見られてよかったよ。確かにこの景色を見るために一月も滞在している人達の気持ちが変わる気がするよ」

「ホホー」

村の人から聞いた話では、そんな人もいるらしい。天気ばかりはいくらもお金や力があっても運次第となってしまうから、それだけ待っても見ることができないこともあるのだろう。

だけどそれだけ待ってもいいくらいに思えるほどの最高の光景だった。

「さて、今日の晩ご飯がうまくできているといいんだけどなあ」

「……改めて見ると、とても食える料理には見えねえな」

せっかくなので晩ご飯は外で食べることにした。地面が水で覆われている中、裸足になって椅子に座って食べるのはなんだか新鮮だ。

少しだけ焦げ目のついた青色の塊が皿の上に載っている。見た目が青色で、カルラの言う通り、あまり料理には見えない。

「それじゃあ、外側の塩を外してと……おっ、中はとってもいい感じだ」  
「ホ〜♪」

「ええ、とてもおいしそうです！」

青色のベラロル塩を外すと、中からは、一昨日川で釣った魚と、大きな肉の塊が現れた。

外側からは想像できなかったのか、フー太とジーナが驚きの声を上げる。

これは塩釜焼きしほかまやと言いつ、塩と卵白と小麦粉を混ぜ合わせたもので魚や肉の外側を覆い、オーブンで蒸し焼きにした料理だ。初めて作るため塩加減がわからないから、そのまま包んだものと海藻わかめを巻いて塩加減を抑えた二種類を用意してみた。

さて、まずは海藻を巻いていない方からだ。

「……うん、シンプルな塩味だけれど、魚全体に均一に塩味がついていておいしいな。蒸し焼きにしているから、前に食べた塩焼きよりも身がふっくらしているぞ！」

皮には塩味が染みこみ、身は蒸し焼きにしたためホクホクと柔らかく、旨みが凝縮されている。一口頬張ると繊細せんさいな白身の甘みがじんわりと口の中に広がって後を引く。塩加減は絶妙で、余分な塩辛さはなく、素材の純粹な味わいが際立っていた。

皮ごと食べても香ばしく、酸味のある果汁を軽く搾ると爽やかさが加わり、箸が止まらなくなる。続けて海藻を挟んだ方を食べてみるが、こちらの方が薄味で、魚の身の味がより際立つ。

さっきの方は少し塩味が強いけれど、ベラロル塩はただしよっぱいだけでなく、味に深みがある

ため、海藻がない方がちょうどいいのかもしれない。

卵白と塩の割合や焼き加減がばっちりだったな。ベラルール塩は少し高価だから控えめにしておいたのは正解だったのかも知れない。

「こっちの肉もうめえぞ。中から肉汁が溢れてくるぜ！」

「柔らかくてとってもおいしいね！」

カルラとコレットちゃんは、肉を食べて感想を言う。

肉の方は中心が少し赤身を帯びており、いい感じの状態になっている。塩釜のおかげで水分が逃げず、柔らかくしっとりとした食感で口の中に肉汁が溢れてきた。そして、肉と塩の味のよさがしっかりと伝わってくる。

こっちの肉は外側が少ししょっぱいから、海藻で巻いた方がおいしいかもしれない。

どちらも普通に焼くのと異なる味になっていた。昔テレビで見て一度やってみたかったのだが、うまくできたみたいだ。こうやって新しい料理に挑戦するのは日々の楽しみである。

美しい景色を見て、その土地の食材を使った料理を食べられるのが旅の醍醐味の一つだ。

「夜も夜で景色がすごいですね」

「一面がお星様でいっぱいだね」

「今までで見た星空の中でも一番綺麗かもしれねえな」

ジーナとコレットちゃんとカルラがそう呟く。

晩ご飯を食べ終わったあとは、明かりにしていたランタンを消して空を見上げる。

夜が訪れるとベラルール塩湖は昼や夕方とはまったく別の顔を見せた。風のない静かな夜、薄く水を張った湖面は完全な鏡となつて空に瞬く星々を余すことなく映し出している。見上げれば無数の星が輝き、足元にもまったく同じ星空が広がっていた。

上下の区別は失われ、まるで宇宙の中心に立っているかのような錯覚に包みこまれる。星々は瞬くたびに水面で揺らめき、無限の光が静かに呼吸しているようだった。

足を動かすと小さな波紋が広がり、儂い美しさを生み出す。

この場所はどれだけの幻想的な景色を生み出してくれるのだろうか。

「空気が綺麗で他に明かりが何もないから星空がここまで綺麗に見えるんだろうね」

「ホーホー」

元の世界でもここまで綺麗に星空が見えることはなかった。もちろん元の世界と形は異なるが、星の集まりである天の川が肉眼で見えるほどだ。この広大な星空の下ではつまらない悩みなどすべて吹き飛んでしまう。

みんなとこうしてこの景色を眺めることができたのは運がよかった。機会があつたらまたここへ来て、このすばらしい景色を楽しむでしょう。

## 第二章 冒険者の街

翌日、俺達はベラルール塩湖を出発し、新たな街を目指して走り始めた。

「コーデオ国もだいたい回ってきたなあ」

俺が転移してきたこの国は以前ジーナがそれほど大きな国ではないと言っていたが、俺が思っていたよりも大きな国だった。路面状況があまりよくないからスピードを出せなかったとはいえ、これまで結構な距離を走っている。

日本よりも少し小さいくらいだろうか。もうそろそろ他の国へ行ってみるのもいいかもしれない。国が違えば文化や生活様式も異なるからこの国とは違ったものが見られるだろう。

そしてこれまでコツコツ走ってきたこともあって、次のレベルアップまで残り六百キロメートルを切っている。さすがに三千キロメートルは長い道のりだなあ。

「昨日と今日はなかなか面倒だったぜ」

「魔物がいっぱいいたね」

「自然が多いから魔物が多いのかもしれないな。無事に辿り着けてよかったよ」

カルラとコレットちゃんの言う通り、ベラルール塩湖を出てから大きい森が多いからか、道で遭遇

した魔物の数がこれまでよりも多かった気がする。

昨日の夜、鼻の利くオオカミ型の魔物が透明化したキャンピングカーの存在に気付いて、周りを取り囲んでいた。幸いコレットちゃんが魔物の存在に気付いてくれて、ジーナとカルラとフー太が追っ払ってくれたが。

「おっ、もうすぐ街に到着だな。そろそろ降りて歩こう」

「ホホー」

無事に街まで到着できたことに感謝だ。俺達はいつも通りに街から少し離れたところで降り、歩いて街へ向かう。

「……うむ。問題ないようだな。通っていいぞ」

「はい、ありがとうございます」

街の入口で通行税を払い、門番の人のチェックを受ける。

龍人族であるカルラは外套を脱ぐといつものように驚かれた。

コレットちゃんの方はそこまで驚かれていなかったから、黒狼族はこの辺りだとそこまで悪く思われていないのかもしれない。

「ようこそアルカンの街へ。一つ忠告しておく、この街は他の街よりも冒険者が多い。そっちな龍人族とエルフ族の娘を連れていと絡まれるかもしれないから、あまり人気のない通りへは行か